

(00:00:00) ゲスト：奥山侑伸

東海林：続いてのゲストコーナーは奥山コーシンさんです。こんばんは。

さらだ：こんばんは。

奥山：こんばんは。さっき紹介ちらっと聞いてたけどさ、あれちょっと止めてくれる。「あるときは歌手」ってのはいいよ、歌ったことあるから。「ある時は出演者」というのも出たことあるからいいよ。でも「またあるときは大御所」っていうとそこだけ古いんだよね。古いつてことでしょ。

東海林：いや大御所って言っても…。

奥山：もうさりげなく言えばいいのにな、と思った。

東海林：という奥山コーシンさんなんですけども、古くは『11PM』『シャボン玉ホリデー』『8時だョ!全員集合』『ザ・ベストテン』、最近では『アッコにおまかせ!』などなど、数々の番組を手がけている奥山侑伸さんです。

さらだ：時々ディスクジョッキー、番組パーソナリティも。

奥山：やってます。

さらだ：歌も歌ってるしね、落語もやってるし。

東海林：結構長いですね、この業界は。

奥山：長い。もういい年だもん。

東海林：だから大御所って紹介したんです。

さらだ：何年ですか、放送作家歴？

奥山：それがね、50年欠けるぐらいやってるかな。

さらだ：もうちょっと手を伸ばせば半世紀。

東海林：テレビ放送が始まったのは？

さらだ：昭和28年。

奥山：28年っていうと、俺生まれたの昭和13年だからさ。

さらだ：そっからはやってないね。実験放送からでした。

奥山：そのころはラジオの三木鶏郎さんを聞いてましたよ。

さらだ：そっか。でも大御所って言っちゃったけど、やっぱりテレビができて、『シャボン玉ホリデー』とか、まだ白黒で子どものときに見てたテレビをもう作ってた人だから、やっぱ大御所ですね。

奥山：白黒だったんだよ。そうそう。

さらだ：で、カラーなんかがちょこちょこ入った頃、もうすごい偉い先生だったでしょ？

奥山：あの当時、カラー番組のときは“カラー放送”って右下に出るんですよ。だけどカラーテレビを持ってる人ならカラー放送を見られるのに、一般の人は「わが家は映らないって、カラーじゃない」ってものすごいクレームがあったんだよ、NHKに。

さらだ：本当、そうなんだ。

奥山：どうしてうちはカラーになってるのに、映らないのかっていう…。

東海林：どうしてカラーじゃないんだと。

奥山：だからカラー放送やってますけども、白黒の受像機では映りませんよって
ということね、はっきり言ってなかった。

＊

秋元康は愛弟子

さらだ：話するとね、いろいろあって1年じゃ終わらないくらいすごい。いまを
ときめく秋元康さんも愛弟子だし。

東海林：秋元さんといえば、AKB 48。

さらだ：それから最近は黒人の人で、演歌の…。

奥山：ジェロ。

さらだ：ジェロ。すごいよね、作詞とかやっちゃって、だけど原点というか、要
するに秋元さんは奥山さんのお弟子さんじゃないですか。だからそんな話もあるし、
いまの巨匠といわれる秋元さんを育てた人だから、やっぱすごい大御所って
ことなんじゃない。

奥山：正確にいうとね、秋元康みたいなやつはどこに置いても成長するのよ。

さらだ：僕んち来なくても？

奥山：来なくても。あれすごいもの、やっぱり。

東海林：やっぱりすごい。ってことは天才ってということですか？

奥山：うん。来たときは高校生ですよ。きちっと挨拶ができる子だったのよ。「先
日はありがとうございました。こうこうこうなりたいんですけど、こうしたらど
うでしょうか」とか。きちっとしてたの。

さらだ：私も遠くから姿を拝見して、じわじわ近づいてったんだけど、昔からい
まとあんまり変わらないですよ。

奥山：変わらないし、兄弟子たちがたくさんいるでしょ。その連中を集めて、「お
まえら、秋元に抜かれるぞ」って言ったのは憶えてるもん。「大丈夫です、抜か
れても闇夜に丸太んぼですから。」っていう。それはわかるね、「偉そうにいい気
になってると闇夜で丸太んぼうでガンッていくぞ」っていうことですよ。

東海林：でもずっと抜いちゃいましたね。

さらだ：どこまでもね。

東海林：どこまでもどこまでも、つき抜けちゃいましたよね。

奥山：すごいね、それは運もあるでしょうね。でもやっぱり持ってるものがある
から運が生きるんだ。

さらだ：そういう秋元康さんを作ってきた奥山コーシンさんという放送作家からいろいろ話を聞こうという回です。

＊

最初に会った放送作家はマエタケさん

さらだ：北海道でお生まれになって、放送作家になろうと思ったのはずいぶん後なんですか。

(00:05:00)

奥山：後です。北海道にいるときは放送作家ってあんまり知らなかったもん。

さらだ：東京に出てくるまでのプロセスが聞きたくて…。

奥山：きっかけはね、ギターがうまかったのよ。

東海林：ちょっと待って。うまかったねって自分でいう（笑）。

さらだ：子どものとき、いろんな才能持ってたんでしょ？

奥山：それは勘違いなんだけど、古賀メロディーがうまかったの。トン、トントンティトティトンティン、トトートトトン。みたいな。

さらだ：アントニオ古賀か奥山コーシンかみたいな。

奥山：ギターが上手いって自分で勘違いしちゃうんですよ。それで出てきたの、「よし、やろうじゃないか」って。だってまだロカビリーの始まる前だもん。それでギターを勉強してバンドを組んだの。

さらだ：だから音楽をやろうと思ったのが先だった。

奥山：そうです。たぶんあの古賀政男の古賀メロディーじゃ追いつかないってのわかるね。

さらだ：その時東京出てきて、それでバンドの何かボーヤみたいなことされて。

奥山：それはジャズのね、やった。

さらだ：それがきっかけで、どなたか放送作家の方と知り合った。

奥山：前田武彦さん。

さらだ：最初は前田武彦さんから始まった…。

奥山：そうです。

さらだ：私、奥山さんの自叙伝を読んで、憧れてこの世界に入った系世代なんだけど。奥山さんの上、その師匠格となる人として四大巨頭がいたと。前田武彦さんもそうだし、その後青島幸男さんとも。それで最終的に、大橋巨泉さんの事務所にいたじゃないですか、でも永六輔さんとは付き合いがない。

奥山：ないですね。

さらだ：でもその四巨頭の中の3人を全部、何かそのDNAをもらって。放送作家としたら…。

奥山：そうですね、この方々は1期生。巨泉さんだけは違いますよ。あの人はジャズ評論家で、全然関係なかったから。

さらだ：放送作家じゃなかった。

奥山：永さんと青島さんと前田さんとで軽佻浮薄3人組。ほんとに軽佻浮薄の3人組だったんだから。

さらだ：それでいろんな番組を作っていったわけでしょ。

奥山：永さんだけはヒステリーだったんです、すごく。男のヒステリーみたいな。だからタモリが「男のおばさん」って名前つけたとき俺も“タモリ偉い”って拍手したもん。

さらだ：タモリさんが？

奥山：永さんはもう、おっかないのよ。われわれはその頃、貧しい生活してるからサンダル履いて行くと、局で「どこ行くの」って止められちゃうわけだよ。永さんもそういう格好で止められたわけだよ。「僕は打ち合わせいくんです」っていうわけだよ。「駄目でそんな嘘ばかりついて」って。「君は責任取るのね」つつって帰っちゃったりするんだよね、守衛さんに文句言って。おっかない人だったのよ。

さらだ：そうなんだ。でもその前、最初前田武彦さんのお弟子さんっていう形で、前田さんはもうそのとき放送作家だった。

奥山：放送作家です。もう押しも押されぬ。

さらだ：いろんな番組やって…。

奥山：それで前田さんが最初に出たんじゃないかな、画面に。どういうことかっていうと、『茶の間のリズム』っていう、ちょっとしたバラエティやってたんですよ。で、それを台本書きながら自分でも出ちゃうんですよ。書くことを書かないで出ちゃうわけだから。だけど書くよりも、お金は高いわけで、「収入3倍暇3倍」って言ったのがマエタケさんなんだ。

さらだ：じゃあ自分が書くところを書かないで出ちゃってしゃべったり。

奥山：つまり書く手間を省いて自分で喋ればいいんだからっていうんで…。

さらだ：私たちが子どものときはもう、前田武彦さんって何かお昼の帯番組か何かで…。

東海林：『お昼のゴールデンショー』かな。

さらだ：その後は『夜ヒット』だった。

奥山：なんかしゃべってたね、その頃からずっと。

さらだ：ずっとそのマエタケさんの弟子として一所懸命カバン持ったり…。

奥山：一所懸命カバン持って。ところが、その弟子がさダメなのよ。「君は車嫌いなのかい」って聞かれ、「えっ？」っていうと、「一度も磨いたことがないね」っていうんだよね。しかも免許持ってないから、マエタケさんが運転してる横で

行くんだけど寝ちゃうんですよ。

東海林：弟子が。

奥山：人の車に乗れば寝るしってさ。

さらだ：それ住み込みなんですか、その当時。

奥山：ううん、じゃなくて通いです。

さらだ：それからどうやって青島さん家に。

奥山：実は、前田さんと青島さんと大橋巨泉さんは同じ事務所だったんですよ。EMANON（エマノン）っていう名前なんだけど、これがシャレててさ、後から読むとNO NAMEってなるんだ。

さらだ：なるほどね、名無しをひっくり返して。

(00:10:00)

奥山：シャレてるなこの名前とは思ったら、アメリカにはたくさんあるのね、エマノンという会社が。そうなのって思ってそこに青島さんがいたから、マエタケさんどこに居て叱られながら、車なんか1回も磨かずに青島さんがやってる『大人の漫画』っていうのが好きで持ってくわけですよ。で見てくれてるかどうかわからない。マネージャー通して持ってたよ。で、マエタケさんに言われたやつも書いてたよ、一所懸命。

さらだ：それで自分が書くのはやっぱり青島さんの面白いネタを書きたいと思って、持ってたならやっぱ見てくれたんですかね。

奥山：やっぱり見ててくれたというのもあったりしたみたいで、なんか全然駄目かもしれないけども書いてたね。「あれはダメだ」っていうんですよ。「あれダメだ」ってことは見てるわけでしょ。あ、と思うものの具体的にはそんなに教えてはくれなかったかな。その後、マエタケさんがその事務所抜けるんですよ。それで抜けて「お前どうすんだ」って言われるでしょ。だけどマネージャーは「マエタケさんはお前嫌いみたいだぞ」っていうから、「そうでしょうね」といって青島さんどこ行くわけですよ。でもね、そういう奴はいないですね。今も昔も。

さらだ：巨頭2人みたいな。

奥山：2人のこう右から左みたいな人いないよ。

さらだ：右から左へみたいなね、受け流しちゃった。

奥山：ちゃらちゃんちゃんちゃらんちゃんとやってたんですよ。

＊

青島さんの弟子に 放送作家たちの横顔

さらだ：青島幸男さんっていうと私たちは『意地悪ばあさん』のね、タレントさんとか、国会議員とか都知事とかそっちのイメージが強いんですけど、放送作家

青島幸男ってどんな人だったんですか。

奥山：やっぱり天才的だったな。すごい。

東海林：具体的になんか。

奥山：なんでこんなことを考えるんだろうなあと思うような。

東海林：ずば抜けてるんですか。とびぬけている。

奥山：うん面白い。だから『シャボン玉ホリデー』というのは、結構な比率で青島さんが書いてるんですよ。

さらだ：初期の頃は何人かで書いたんですか。

奥山：初期のころはマエタケさんですよ。

さらだ：そうなんだ。『シャボン玉』ってそうなんだ。

奥山：だってあれ頭からギャグですもんね。牛の鳴き声までが。

さらだ：じゃあ「お父つつあん、おかゆができたわよ」とか、あの辺は。

奥山：あの辺はどうだったかわかんないけど俺が入ったときはもうあったの。

東海林：おかゆができたわよギャグが。

奥山：だからモーっていうのと、それから「おかゆができたわよ」っていうのが、

さらだ：それから「お呼びでない」。

東海林：定番ですよ。

さらだ：あれ、30分番組ぐらいでしたっけ。

東海林：30分でしたねえ。

さらだ：じゃあ3つあったら結構それでいっぱいですよ。それに歌があって。

奥山：その3つがねえ…。

さらだ：大変だったんですか。

奥山：大変だったね。

さらだ：あれって1週間に1回ってことはどうやって撮ったんですか？ 当時収録とかは…。

奥山：生でやったときもあった。あんなの、よく生でやったね。収録で撮りだめっていうのはなかったような気がする。撮って出しみたいのがあって。

さらだ：毎週そうですね。そのコントはどこで考えてたんですか、青島さんたちは？ おうちで考えて、誰かが原稿を取りに来るとか。

奥山：うちで考えて、そのころFAXも何もないんだからさ。

さらだ：メールもないしね、もう手書きでしょ。

奥山：もうギリギリ。手書き。汚い字なんです、青島さんの字が。金釘流っている。もうなんかこれ、「青島さんこれ読めないよ」って「いいんだよおまえ、読めるやつがいるんだから」。それから「これ大丈夫かな」って、「印刷になりや大丈夫だ」っていった。

東海林：それじゃ、全部印刷するんだ。

さらだ：昔の台本屋さんって、それガリ版でね。綺麗な字で書いたのね。

奥山：それに「奥山来い」つつって、持ってかされるわけですよ、印刷屋へ。日本テレビの横にあった印刷屋へ。そこに印刷でアルバイトでガリ版書いてたのがたかたかしなんですよ。

さらだ：たかたかしさんって作詞家の？

奥山：作詞の。

東海林：ということはたかたかしさんはいろんな人の台本を読みながら勉強しちゃったと。写すだけでも結構勉強になるんですけどね。

奥山：だけど勉強してないってわかったのは、あの台本を帰ってきて見たら、「オチは当日」って書いてあるんだよ。オチは当日よろしくっていうのは、偉い先生が書かなきゃ駄目なんですよ。

(00:15:01)

その偉い先生は誰かって言うと、塚田茂先生が、オチは当日みたいな。

東海林：オチは当日。楽な手ですね。

さらだ：いいかもしれない。

奥山：だけど当日に出なきゃさ、やばいよね。

さらだ：当日つままないネタじゃね。

奥山：当日っていうときは当日に、持って行くわけですよ。塚田さんなんかは結構お年だから、植木さんとか捕まえて、「植木屋、ちょっとこれどうだ」とか、こういう聞き方できるわけですよ、青島さんも行けるわけですよ。われわれは「何考えてんだろ。そんなおまえ、当日なんかあるわけない」んだから。

さらだ：塚田茂さんも『シャボン玉』書いてらしたんですか？

奥山：書いてましたよ。

さらだ：錚々たるメンバーで。塚田茂さんといえばやっぱり『ヒットスタジオ』のね、どんどんクジラというそういうイメージでしょ。

奥山：そうですね。『シャボン玉』の方は少ないとは思いますが。

東海林：スタッフ東京の元締め。

奥山：それからね。いま“あの人”の息子がすごく活躍してんだけど…。

さらだ：清水東さんのお父さんでしょ。

奥山：清水東のお父さんが書いてたんですよ、『シャボン玉』。津瀬宏さん。

さらだ：伝説の放送作家ですよ。

奥山：彼はもう豪快な人で。

さらだ：面白かった。

奥山：私生活も台本も面白い。

東海林：例えば、どんな私生活で？

奥山：右手がないんですよ。手首から先が、事故でないんですよ。だけど車の運

転はするんですよ。車のハンドルになんかちょっとこのなんかつけてね。津瀬さん、ドラマも書くしバラエティも書くんで、『「おまわりさん、敬礼！」』っていうドラマも書いてたんですよ。これはホームコメディみたいな、ちょっと軽いコメディ。で、それを書いているときに駐車違反をしてるわけですよ。新宿の信号ど真ん中に止めてて。

さらだ：津瀬さん自身が…。

奥山：津瀬さんが。その頃はそんなでもなかったけど、それにしてもここで止めるか、って場所で止めてあって、酔っ払って出てきたわけです。お巡りさんがいるから、「俺の車だ、どけ」って乗ったわけですよ。ただお巡りさんさんびっくりしてね、態度はでかいし、ヤクザかも知れないけどヤクザじゃないかもしれないし、「あの」って言ったら、「どこの署のもんだ」っていうから「あの、あそこの新宿署です」って。「どちらさまですか」ってったら、「俺は『おまわりさん、敬礼！』を書いている作家だ」って答えて捕まっちゃっんです。

東海林：捕まっちゃったんだ。捕まるよね。

奥山：津瀬さん、それからまた酔っ払って帰るわけ、車運転して。それで家の前でおしっこしたりよろよろよろよろしてっから、またパトロールのお巡りさんが「あれ大丈夫かおじさん、おじさん大丈夫か」っていうの。「失礼なこと言うな。大丈夫だ。いま俺はちゃんと運転して帰ってきた」って言ったんですよ。それでお巡りさんが「えっ」と思って、「どの車ですか」と、「そこにちゃんと止めてあるだろう」って言って、ボンネットやったら熱いわけですよ。でね、また捕まっちゃった。豪快でしょ。

さらだ：そういう豪快なね、昔そういう人がいっぱいいた。今はなかなかそういうふうにはできない。

奥山：いないっすね。それで書くのはきちっとしてますからね。

さらだ：本当、「伝説の作家」と言われてて。私も息子さんの清水東さんとお仕事を何度かしたことがある。

奥山：そうか俺、ちゃんと子どもの面倒見ろって言われて彼の面倒見たんだよ。

さらだ：すごいハンサムの人ですよ、イケメンですよ。それでその方と一緒に仕事すると必ずNHKの方とかいろんな方が、津瀬さんの話をするから、どういう方だと思ってたらそんな方…。

奥山：津瀬さんは、昼間会うとね「奥山、ちょっと来い」って。「はい」って。「お前こないだラジオ出てたな」「出てました」「面白かったぞ。あれは伸ばせ、そのまま」「はいありがとうございます」って。それが夜飲むところに行くと「何やってんだ、このゴキブリ」ってんだよ。

さらだ：そんなに変わってるんだ。

東海林：お酒飲むと変わっちゃう。

さらだ：豪快というかね、そういう人だったんだ。

奥山：すごい。

さらだ：でもそういういろんなキャラクターの人が『シャボン玉』を書いてて、やっぱり青島さんのカラーになってたっていうのはやっぱり。

東海林：結構青島さんのカラーだったね。

さらだ：だって私たちの中では何か『シャボン玉ホリデー』イコール青島幸男作、っていうイメージがすごくあって。

東海林：やっぱ青島さんが出演してたからかもしれないですね。

さらだ：というところもあるかもしれないですよ。でそういうのを見ながら奥山さんもなんとなく、その後奥ちゃんとか呼ばれては、テレビに出る放送作家になってく。

奥山：なったんですけどね、出ることはみんながやってるものだから、そんなには抵抗なかったんだよね。でもやってみて「ああ全然違うわ」ってのはわかるね。

(00:20:02)

青島幸男とか前田武彦とか、永六輔、大橋巨泉。すごいんだよね。

さらだ：青島さんとマエタケさんは俳優もやってたじゃないですか。青島さんはおばあさんだけど、マエタケさんなんか普通のホームドラマとをやってたから。

奥山：映画の『釣りバカ日誌』も出てたしね。

さらだ：奥山さんは、そこまではいかず。

奥山：ダメなんだ。

さらだ：歌を歌って、ということですよ、その話はまたあらためてゆつくりと聞きたい…。

＊

『巨泉・前武のゲバゲバ90分!』のころ

東海林：僕なんかは非常に見てた番組というと『ゲバゲバ90分』で、司会が巨泉マエタケだけでしょ。もう大巨匠の司会者2人でやった番組っちゃうので結構驚いたんですよ。この番組でも大変だったんじゃないですか。

奥山：書くのが大変だった。半年だけやるのねあれ。それで半年お休みになって。

東海林：ナイターのないシーズンだけとかそういう感じだったんですか。

奥山：そうなの。

さらだ：でもずっと続いた感じがしましたよね、お休みがあってもね。

奥山：やっぱりインパクトあったんだね。半年の間に、スпойルされたやつを何とかかんとか何か吸収、もう1回あの栄養補給みたいなことをして、またあれやるんだよ。

東海林：じゃあ、10月からスタートしたもの。

奥山：そうだよね。

さらだ：あれはどういう企画から成り立った番組なんですか。

奥山：あれアメリカに『ラフ・イン』っていうおもしろいコントが凝縮された番組があって、それを『11PM』を作った井原高忠さんって人が日本に持ってきて、「とにかく作家集めろ」つつってみんな集めて、「これをやりたいんだけど、どうかね」っていう。

東海林：何人ぐらい集まったんですか。

奥山：何か結構集まっていたいね。

東海林：作家だけで。

奥山：でも後半から、例えば『ゲバゲバ』書いたのは喰始とか、あの辺も書いてるけども、その時はさすがにいなかったね。

東海林：最初はいなかった。

奥山：最初はいなかった。だけど漫画家の人がいたりとか、いたよな。

さらだ：一貫して最初の立ち上げから最後までいたのは奥山さん。

奥山：いた。

東海林：最初、一番苦労はどんなところにありましたかね。

奥山：いやだって、とにかくもう休みなくコント、ギャグの連続だもんね。

さらだ：いまから考えたらスッゴイ洒落た番組だったね。やっぱアメリカナイズされてるっていうか、いまあんまりないですよ。

奥山：うん、作るってのはないね。

東海林：いまは何かタレント任せでギャグやってる番組ばっかですもんね。

奥山：タレント任せでギャグじゃないもん。

さらだ：僕に言わせてみれば。

奥山：タレント任せのおふざけをやってるでしょ。去年、俺どっかに書いたのよ。いまエンタメエンタメって言ってる。だけどダメだと…。

東海林：エンタメじゃないと。

奥山：俺のいうエンタメは演技をためろって。

さらだ：演ため。

奥山：ためるのも何もなくってダーツともうやっちゃってるからね、ってこと書いたよ。だからダメだって。

さらだ：萩本欽一さんも同じことではないけれども、大きく分けると似たようなことをおっしゃって帰りましたね、やっぱ巨匠は。秋房子さんとしていらっしやったんですけども。

奥山：そうね、あの人たちも考えたもんね。

さらだ：いま言われたんでやっとなかったけど、エンタメって演技をためる。そ

れがエンターテインメントなんだ。

奥山：そうか、欽ちゃんは作家秋房子としてきたんだ。あの人がものすごい勢いでコント55号でブワッてきたときに『ゲバゲバ』に出てんですよ。

(00:25:03)

さらだ：そうなんですか55号も。

奥山：でこの2人がもう一番忙しくて、遅れてくると怒鳴られてた。「何やってんだバカ野郎」って。

さらだ：どなたに？

奥山：井原高忠さんに。「皆を待たせて何考えてるんだ」っていう。みんなも格上なんですよ、宍戸錠さんとか、朝丘雪路さんとか。あの辺が、で一番若いのがコン55号だったんです。でも大御所だった。

さらだ：そういう時代だったんだ。

奥山：面白かった。

さらだ：宍戸錠さんとか朝丘雪路さんって、宍戸錠さんは日活のマイトガイ？

東海林：ダイナマイトガイだよ。マイトガイって。

さらだ：そんな超一流映画スターとか、それから朝丘雪路さんは名門のお嬢様、女優さんじゃない。それが『ゲバゲバ』とかってのは…。

東海林：ギャグに出るとというのが、やっぱり出演交渉はすごかったんですかね。それは…。

奥山：ああそうか、でも本人もやりたいような人柄っていうか質を持ってるね

東海林：なるほどね、でも『11PM』もやってたから、もう朝丘雪路さんは巨泉さんと一緒に。「朝にまるで弱い朝丘雪路」って。

さらだ：そうなんだ。

奥山：やってたやってた。でもすごい人がやってたね。

東海林：常田さんも。

奥山：常田富士男さん。

さらだ：そういう人がいた。とにかく私『ゲバゲバ』はピッっていうあれがもう洒落てたのね、インパクトがあって。

東海林：アニメーションでね。

さらだ：そう。今はそういうの当たり前のように思ったりするじゃないすか。使い方として、でも、あの当時としては。

奥山：実写とアニメのあの合成っていうのは初めてあの番組がやったんですね、そういえば。

東海林：それとCGっぽいついていうか、ピアノの上で爆発させたりとかね、ピアノ弾きながら結構…。

奥山：つまり技術的にも新しい試みをやってる。クロマキーなんか使ってやって

奥山：それぐらいやっぱり強力だったね。

東海林：「なんだバカ」も書いてある。

奥山：書いてあるんですよ。

さらだ：違う人が書くとすぐばれちゃうんじゃないか…。

奥山：ばれたんですよ。ラジオの番組でね、巨泉さんがどっか行くときにひと月分ぐらい録るわけですよ、録りだめってやつね。それですごく若いやつがいていっぱい書いてきたんですよ、みんな書いてくるんだけど、そいつのが特に優れたんですよ。いまでも憶えてるんだけど、あの「人間は考える葦である」って言うやつがね、飛行機に乗ってそれで落ちたってさ、「大丈夫だ、パスカル（助かる）」って言ったんですよ。おかしいと、ここで使ってあげようと思ってそのままひゅっと出したんですよ。そしたら巨泉さんがしゃべったときに「奥山これ、バカこれおまえと違う」というんですよ。「どうして!？」っていったら、「エロキューションが違う」というんですよ。

さらだ・東海林：エロキューション？

(00:30:00)

奥山：「セリフの呼吸が違うって、お前の台本じゃない」というんです。僕の台本はさ、「えっへっへ」とかさ「なんとって」とかさ、書いてあんですよ。

東海林：奥山さんが書くときは、奥山さんに大橋巨泉が乗り移って書いてるわけなんですか？

奥山：そうなんですよ。

さらだ：そうすると違う人のときは違うふうに…。

奥山：巨泉先生はそうなんだけど、欽也さんの場合は、先に喋る前に、「あの、あの、うーん、ね」とかって言うんだよ。「あの、はやはや早い話が」と言うようにちょっところ、訥音になったりするんですよ。あの人の場合。

さらだ：それも書くんですか？

奥山：いや書かないけれども、それがいるんですよ。なんか知らないけれども。

さらだ：聞こえてきちゃう。

奥山：だから笑い方だって「ハハハ」って書いたとしても、あの人の場合は顔が横にいつちゃうもんね、「ツハー」って。例えばね。そういうようなのがいたね、何人かね。

さらだ：他にどんな方がいたんですか？

奥山：いやカトちゃん、加藤茶もいたりするよね。

東海林：カトちゃんにもなる。

奥山：なるんじゃないんですよ。頭の中にカトちゃんがいて、長さんが「おいっす！」って出てくるわけですよ。何かそのリズムで書いてたみたいな気がする。

＊

突然ですが立川談志の話を

横道それるけど、立川談志さんと久しぶりで会って、うちへ行ったときいたんですよ。いたんですって嫌がってるけどそうじゃない、いなきやいないでいいなと思いがちちょっと用事があったら、「今いるからちょっと上がって」って言う奥さんが、おかみさんが。「いいですよ。突然ですから」って。「いや、そんなことない。あんたの顔見たら喜ぶから」「いや、喜ぶってことじゃなくて心の準備が」って。「いやいやまず」って。そしたらね、体調悪い時は悪いんですよ。で、「あ、お邪魔します」っていうけど「ん…」って言うただけなんですよ。「あーだめだ、あーもう俺駄目なんだよ。」って。

あの人2年周期で死ぬ死ぬって言ってるんですよ。今年は生きてるんですけどもね、今年は生きてる年かな。前年だったら「もう今年は死ぬ」とかっていうような。何ていうのかな、本人が明確に言ってて、横にいる年寄りが、年寄りって誰だっけほら、野末陳平さんのことだけどこれが。ハハハ。年寄りが「バカ。

(00:32:30)それはおまえ贅沢だよ」って言ってんだけど、老人性うつ病かかって、そういうふうに出てた。言う時があって、こう起伏が激しいときにぶつかるよね。「さてどうしよう、大丈夫ですか」って言って、大丈夫なわけじゃない。ね。でもふつときて、「いやそれでな」って話したの。そうしたらね、『鉄拐』っていうね、話があるんですよ。落語のね。

東海林：『鉄拐』全部やるとして。

奥山：鉄拐って人の名前ですね。そしたらね、「俺の頭の中にいる鉄拐がな、勝手に喋りだすんだよ」って言ったの。「師匠、それは全く同じです」と。「僕の頭の中にいた谷啓が、勝手に喋りだすんですよ」って言ってね、盛り上がった。天才に近づいたじゃないか俺ら、みたいなこと思ったもん。「師匠、それはそのままやってください。大丈夫」大丈夫ですってのおかしいけども、言葉は「大丈夫です」とは言ってないと思うけども、「師匠それはね、そういうことってありますから、いいんじゃないでしょうか」つつってね、一応気持ちの中では褒めてきた。で、だから、谷啓さんがね、歩き出すんですよ俺の頭の中で、台本書いてる時に。で関係なく「ムヒョー」って言っちゃうんですけど。そうすると、橋幸夫が出てきてその頃だからね、「霧氷」と歌うわけですよ。

東海林：古いな（笑）。

奥山：その時代だから。だけど俺は別に歌いたくないんだけど、谷啓さんが「ムヒョー」って言ったら、橋幸夫がゲストなもんだからさ。それで「何やってんだ？ おまえ」とかってね、いうことになっていくというようなことがあったもんだから。だから師匠も、自分の頭の中にいる登場人物が勝手に喋り出してんだ。っていう。あるんだね、そういうことね。

さらだ：私たちはそういうことなかなかね、難しくて七転八倒するんだけども。

奥山：七転八倒してるんですよ。師匠も七転八倒してるんですよ。そりゃレベルの違いはあるよ。だってさ、俺天才だと思うんだわ。皆横に付いてた人ね。青島さんもあの人も、マエタケさんも巨泉さんも永さんも。師匠もなんだっけ立川談志さんも天才なんだ。(00:35:02) だけどレベルが違うけど七転八倒してるのよ。

立川談志って高校中退で16歳から柳家小さんのところへ行って、ババババババっていっちゃってすごいなあと。嘶は1回聞いたらいきたいできるらしいんだ。そんな人がよ、ついこの間も国立演芸場でやってきて、降りてきたらすぐ、「うーん、あのおかみはおまえ、何で吉原行ったんだ」っていうんですよ。ただみんなもうさっといなくなっちゃうんです。俺も目が合わないようこういうふうにしている。そこに評論家の川戸貞吉さんって人がいて、その方と話したから「よかった」と思って。

「その吉原は女は入っていけないとこなんだと。それを何であのおかみは入ってったんだ」って、何十年やってる人が疑問を持ってる。そういう落語が着物着てる人がね、悩んでるんですよまだ。だからレベルが違うんですよ。こんだけレベル違うけれども、七転八倒は同じだから。「同じ悩むんだったらば、レベルの高いことで悩め」と。これ皆に言ってきたのよ、弟子たちに。なんでかっていうと、「みんな悩んでんだ」と、「お金明日、ちきしょうまあ家賃払えなくなってどうしよう」という悩みも、「車買わなくちゃ月賦」って悩みも同じなんだと。家賃が7万円で車の場合は80万でと、だったらでかい金額で悩めって。だってそうでしょ。

さらだ：どうせ悩むならね。

奥山：いま思い出した。そういうことでレベルの高い悩み方を皆さんしませんか、夜中だし聞いている人。

さらだ：そうですよね。同じ辛い思いをする。

奥山：そうなんだ、ぐっちゅぐっちゅぐっちゅぐっちゅしたところで悩んでないでっていう感じ。

東海林：奥山さんは立川談志さんとどこで知り合われたんですか、出会いは？

奥山：これはね、勝手にファンだったんですよ。「生意気な二つ目がいるんですよ」と思ってたの。その頃から、マエタケさんと談志さんは仲いいんですよ。その頃は遠くで見てたし、ずっと立川談志になっても遠くで見てたんですよ。

＊

談志一門についても話そう

奥山：で立川談志の弟さんがいるんですよ、弟さんが立川企画の社長なんですよ。

で世間ともめたときに、落語協会ともめたときに…。

東海林：真打がどうのこうのって。

奥山：立川流って作ったわけ。どうしてもめたかっていうと、立川談志の弟子が、真打、先生方、師匠がいるとこで演るわけですよ。審査をして、こいつは真打だとかっていうときに、すごくいいやつ、いまは立川談四楼っていうんですけど、この人がその真打試験のときに談志師匠がいなかったら落ちたんですよ。他のバカが、バカがなんて、その時に受かった人に申し訳ない、すいませんね。私の弟子なもんですから、「そのバカが受かってなんで談四楼が受かんないんだ」って言って。「こんなだったらいっても意味がない」って抜けたんですよ。抜けたときに、立川談志の弟が立川流を作りましたからっていうんです「はいニュースで見て知ってます」。で「あの入りませんか」って言ったんですよ。

さらだ：そんなお付き合いなんですか。

奥山：「入りませんか」ってときにね、「バカおっしやい」って言ったんですよ俺。「立川談志のファンなのに立川流に入って何で叱らなきゃいけないんですか」って言って。横からこう見てたの。だから志の輔さんも見てたし、志らくさんとか談春さんっていうのが立川ボーイズって作って、「こいつら何とか面倒見て欲しいんだけど」、って「頑張りなさい」なんて言って。俺失敗して。だからさその人たちもそうだよ。だから志の輔さんもそうだよ、「わかったよ」つつつて、ご飯ご馳走しておけば、「おーい」って言えたのに。高田文夫の地位に入れたのに。それはさ、そんなことしてないからさ。「兄さん」になっちゃうのよみんなが。えらいことだぞ。いま高田文夫、幹事さんだからね。

さらだ：落語の世界は先に入った人がみんな兄さん。

奥山：1日でも先に入ったら。

さらだ：野球はね、1個でも年上だったら全然いいんだけどね、落語は…。

奥山：だからさ、筑紫哲也さんを好きなんですよ。ものすごい造詣が深いんですよ。筑紫さん入りませんか、立川流につて。いま必死になって…。

さらだ：わかった企みが。

奥山：だからあの方がもし出てきてさ、ラジオで「えーどうもあの、えー多事争論」って「えー」が入ったら入ったと思ってください。

(00:40:04)

さらだ：「多事争論」にね、えーが入った。兄さんと呼ばれてるわけですね。そうになったら。

奥山：もうね兄さんなんて呼ばそうと思うんだけど、これがねそうはいかない。やっぱり世の中の仕組みってのはね、そうはいかない。野末陳平さんが入ったんだよ。誰も兄さんと…。

さらだ&東海林：呼ばないんだ。

奥山：呼べないし、弟弟子を「おい」とは呼べないでしょ。造詣が深い人で、中国の話なんかさせたらね、えらいすごいんだから。

さらだ：なんか同じ議員さんだったしね、2人。

奥山：だから駄目よ。せっかくね、後から入ったのに。まず誰か入れなきゃね、秋元入れるか？

さらだ：それはいいかもしれないですね。そうすると。

奥山：あの人もそうですよ、ビートたけしさんもね、立川錦之助っていうんですよ。

さらだ：そうなんだ。

奥山：そうなの。

さらだ：いつ頃からお入りに？

奥山：結構古いですよ。

さらだ：でビートたけしさんとどっちが。

奥山：兄さんですよ。それから監督の山本慎也さん、「いややったですね、あれですね、あれですね」っていう人。あれも先輩ですよ。兄さん。

さらだ：入りませんか誘われたのは昔だったけど、入ったのが遅かったんだ。だからそれで、遅かりしね。

奥山：遅かった。

さらだ：すぐ入ればよかったね。

奥山：桂竹丸って友だちの落語家がいてね、真打になった。真打になったら弟子を取れるんですよ。これが大学のおときからずっと台本を書いてるから、立場上「徳永くんって」呼んでたのが、竹丸になっても「竹丸」って呼んだのが、真打になったら、「コーシン先生、入りませんか、名前決めてあります。桂オクマル」だって。バカにすんな。「やなこった」って、それで立川に入っちゃったんです。それで「竹丸、立川流に入ったぞ」っていったら「入りました。入りましたね、入りましたね」って嬉しそうなんですよ。「こらコーシン」っていうんですよ。それはだって…。

さらだ：落語の世界ではどこ流とか関係なく。真打が師匠で、二つ目には「おい」なんだ。

奥山：だからそんなとき毒蝮さんだってついこないだまで、「先生、なんか仕事やってね、一緒に」っていったのが、「入ったの入ったの入ったの、コーシン」つつってんから。ミキカチさんもそうなんだから。「入った入った入ったな、コーシン」だって。

さらだ：ミッキーさん立川流は、真打？

東海林：ミッキー亭カーチス。

奥山：真打だよ、うまいぞ。

東海林：僕一度落語、うまいですよ、彼は。『まんじゅうこわい』がね、英語で『まんじゅうこわい』やってましたからね、あれも面白かったですよ。

さらだ：なるほどね。やっぱそういうふうに言われたときはすぐ入っておけばね。ご馳走しとけばすぐ真打だったかも。

奥山：マスターの東海林くん。入るんなら紹介するよ。

さらだ：そうそう、お入りになれば。

奥山：もう1日も早く、入らないと。

東海林：でもそうすると、こしらが俺のことを呼び捨てになったちゃう。

奥山：そうだ。こしら。ここんちで朝やってる。

さらだ：こしらさんはあれでしょ、奥山さんが発掘したんでしょ。

奥山：うん。これもね、ちょっとごめん、正確に発掘したんじゃない。あいつが出ただけなんだ。あいつはどこにいてもね、売れると思う。

さらだ：秋元的要素が…。

奥山：いや、秋元が正統派の詐欺師だとすると、こしらはね、なんていうんだろ
うな変形バージョンだね、突然変異でポンと売れたり。あれ売れますよどっかで。
変だもん、絶対変だもん。いいね、いいの掴んだと思ってこのラジオ日本。何年
か経つとね、「こしらはうちの」なんて言えるの。そういう意味でいうと入んない
ほうがいいわやっぱりな。東海林君も上から言わないといけない。

さらだ：でもマスターも入っとけばそのうち誰かが入ればね。

東海林：じゃあ僕がさっき入って、たまこさんが次に入りゃいい。

さらだ：私は入らないから大丈夫。

東海林：あ。そっか。

奥山：だけどそれは知らなかった。子どもの頃から、落語算数縦社会っていうふう
に決まって…。

＊

放送作家についても語っちゃおう

東海林：放送作家の社会も縦が少し…。

さらだ：でも私ね、奥山さんのすごく好きな言葉が。「石の上にも残念」とか。

奥山：それはよく言ってたね。

さらだ：私の話聞いて、「放送作家ってそういう、3年やってみろ」とか言って。
「石の上にも残念と言うだろう」みたいな。

奥山：「3年やったら何とかなるっていう目処がつくから、3年やって駄目だつ
たら石の上に残念ということになりますか」って言ったの。

(00:45:01)

さらだ：でも意外とそういうサイクルでやってますよね。でも、放送作家っていうのはやっぱ売れたが勝ちよね。先に真打になったりとか関係ないからね。真打ないしね。

東海林：どんどんどん下から。

さらだ：真打とか作ればいいのにね、放送作家の。

東海林：放送作家の真打つくりゃいいんですよ。

奥山：それ意味ないじゃない。

さらだ：師匠とか呼ばれて。

奥山：いやあ。

さらだ：「使わないように」とか言ったりしてね。

東海林：奥山さん最後にね、いまテレビ業界がちょっと斜めになってきたとか、テレビがつまらないとか、テレビ離れとか言われはじめてんですよ。

奥山：離れるでしょ、そりゃ。

東海林：やっぱりさっきのエンタメがないから。

奥山：つまらないと思うもん、テレビは。

さらだ：面白くしようという気は、これから。

奥山：面白くしたいんでしょうけども、何かすぐしても、世代が違ったりするしね。ただバラエティはね、人によるでしょう。さっき言ったみたいだからもうどうでもいいのが集まってわーってやってるという、ダウンタウンみたいなもの。ダウンタウンって優れてはいるんだけども、疲れてるっていうと番組が多いっていうのと、大変でしょ。だから番組を選んでこことこことこことやってるのが紳助さんでしょ。あれね、巨泉さんのやり方なんですよ。各局に一つ違う種類の番組を持つというのは。

さらだ：ちゃんと戦略がある。

奥山：ポリシーがあった。「売れたら何でもバーッとやっちゃうのは駄目だ」と。だから、すごく売れてるときにすごい値段で、「映画の解説をやりませんか」ってきたんですよ。映画の解説をアタマで、この映画は何とかかんとかって言って、「なんたっておまえ見ろ」みたいなことを言えと。で巨泉さんは断ったんですよ。「もったいない、どうして断ったんですか」って言ったら、「だってバカ、淀川がいるじゃねえか」って言ったんですよ。淀川さんがいるのに、あれ以上のは出ないと。すごいぞ淀川さんって。もう知ってんのかな。

さらだ：知ってますよ、「さよなら、さよなら、さよなら」

奥山：ラジオ聞いている人に向かって言ってるんだけども、その人たちうなずいてるのかな。

さらだ：うなずいてますよ。

東海林：淀川さん。

奥山：「はい、まあどうでしょう、怖い怖いですね、はい、カメラさんアップしてください」って言うのね。「はい、どうでしょう。はい、1万5000フィート撮りました」っていうんだよ。1万5000フィートがどれぐらいのものかわかんないですよ、映画は。それを言っちゃうぐらいすごい人なんですよ。「はい使ったのは3000フィートなんですね」って言って。3000フィートはどのくらいか知らないのよ。だけどあの人の頭の中にはあるわけですよ。「っていうやつがねやってるのにね、なんで俺がやんなきゃいけないんだ」って言うときに、高島忠夫さんと前田武彦さんとマスダ何とかさん。すると、「本当にいいですね」って人がやってたわけですよ。

さらだ：水野晴郎さん。「映画って本当にいいですね」ってやってましたね。

奥山：「だから俺はやんない」、巨泉さん、やんないという偉さは持ってるんですよ。水野さんは大丈夫ですよ。他はどうなんでしょうね、好きだからやってたんですよ。好きじゃなかった人はお金がいいからやったんですよ。ていうことになるのと紳助さんが、いまあのプロデュース能力ってのを買うけども、おバカブームを作っちゃったんですよ。本当にバカをテレビの場合、前で、バカって言えるのはあの人だけなんですよ。

巨泉さんは芸能界でバカっていうのは2人いるんですよ。ちゃんとしたのにバカって言うのは。大橋巨泉と松山千春ですよ。松山千春さんは「はは、バカ東海林元気だったか、ああ、ああ」っていう人なんですよ。巨泉さんは「東海林、バカ、おまえ元気か」とこうなんですよ。だけど、普通になんか言って「おまえほんとバカだな、おまえ痛いぜ、頭痛いぜ」ってのはあの人だけなんですよ。

さらだ：あと女の子の…。

奥山：ボ、ボク、ボコ、ボア、Pabo。韓国語でバカって言うんだったって、あれ。

東海林：Pabo って韓国語のバカなんだ。

奥山：そうなんすよ。売れてるんだよ。だから芸能界だから、バカはキャラクターですよ。ね。バカでどこが悪いのだよ。あのバカよりももっとさ、利口な人たちがさ、貧しい生活してると思うよ。ってやったのは紳助なんだもん。あの行列できる何とか。

さらだ：『行列のできる法律相談所』。

奥山：あのときの紳助さんの喋りはね…。

東海林：前は行列は法律相談の番組で。

さらだ：法律相談所の番組で、いまは法律相談って看板がついているけど。

東海林：必ずね、相談が3つくらいあったのが、いまは1個。

さらだ：1個、ずっとトークですもんね。

奥山：ほら、専門学校教えてるでしょ。「おまえ、紳助さんののをコピーして勉強しろ」って。

(00:50:01)

あんな言い回し、どこにあるっていうぐらい。すごいね。だから、原点に戻ろう。そのさんま、たけし、それから誰、もう1人、タモリ、この3人が出てきたときにテレビが変わったんですよ。本音の時代が始まったわけですよ。それからプラス所ジョージ、紳助、これがいたら、放送作家はいりません。勝てないんです。

どうやったって勝てないのは、さんまさんがゲストで「次の方ゲストです、すごい方です次の方は。あの加賀まりこさんです。」ってでてきたときに、加賀まりこさんがヒョウ柄を着てきたわけですよ。「わあお」って言うわけですよ。「加賀さん、ヒョウの次にヒョウ柄が似合う人」って言ったんですよ、「ちょっと待ておい」と、俺は笑えなかったもん。愕然としたもん、本当は笑ったけどひっくり返ったけども、「台本書けないぞこれは」と。そこら辺にいる、並みいる作家は全部ひっくり返ればいいやと思ったんだ。勝てないから、それで、加賀さんがヒョウ柄着てくるかとかとかわかんないんだもん。ていうことになると、言ったことをまとめるだけの放送作家がまわりいっぱいいるんですよ。言わないけど大岩だとかさ、あの、それから誰、いるじゃないか、あれやってる。ええと『から騒ぎ』で出てくる放送作家の。

東海林：岩立？

奥山：あの辺がギリギリ何かで生き延びてるかっていうと企画力があるんです。あの連中は。それはすごいよ。これは新しい放送作家の生き方で、頭の白いの。演出家。ひら・・・。

さらだ：高平さん？

奥山：高平だ。

さらだ：ひらっていうから。高平さんですね。

＊

いまのテレビ界しゃべり倒そう

奥山：高平さんが本当は新しい放送作家の走りなんですよ。タモリを連れてきて、タモリと一緒に番組を作って、タモリを売るように売るようにするということは番組売れるってことは局にいいことよ。それで局っていうのはどこの局もそうなんだけど、いわゆるタレントとか売れてる人に弱いんですよ。そこを巧みにこうバツといたら、それはいまでもこれからもできるから大丈夫なんだな、やればいいさ。

あの人は『宝島』の編集やってたから、その時点では台本は書けないですよ。それからどんどんどん書けるようになってきてるから大丈夫なんですよ。生き方としてね。だからこんなとこで、こんなとこでごめん、これカットな。グ

チュグチュグチュグチュじゃ駄目よ。本当に。あの人だって放送作家なるんだったらさ、もう抜けなきゃ。もうこんな、こんなっていうか、今、何つうの、金魚鉢みたいな手を、こんなとこでぐずぐずやってたら駄目だって。だからいま言ってたなにひら？

さらだ：高平哲郎さん。

奥山：あの日、なんで高平って偉そうなこと言うかっていうと、こないだ会ったときに、青島幸男が生きてる時に、「あの、青島幸男さんの家遊びに行きましたね」と「よかったね。」と。「『よし、おまえは奥山の次の弟子だ』って言われましたから」って。じゃあ弟子関係としては、俺の下にはなかにし礼がいて、たかたかしがいて、高平ちゃんがいてと、こういう流れだからね。だからどうしたって何でもないすよ。そうかあって言うだけなんだけど一応流れとしてね、で彼がその新しい放送作家のあれを築いた。で、それをこう引っ張ってるのは大岩、岩立、その辺じゃないか。

いま局に企画力ないから。(00:55:00) あんだけお金もらってれば、考えることないんだもん。「何かないの？」って言ってればいいんだもん。

東海林：給料ね。みんな、1000万以上もらって。

奥山：そう。それは彼らが悪いんじゃないからね、システムはそういうところ入ったものの勝利だからね。失敗した。入りゃよかったね、偉そうなんだろうね。

さらだ：「何かないの？」って。

奥山：「何かないかな、ろくな放送作家いないなあ」とかって言ってればいいんだもん。言われないうにすればいいんだもん。

東海林：どうしたら。

さらだ：企画力のある、それをしのぐよう。

奥山：企画力ともう一つは、売れるタレントを捕まえる。

東海林：いまだったら立川こしら。

さらだ：こしらさんね。

奥山：こしらがな、あれがうまくいきやいいけど。売れそうなタレントをちょっと何とかして、そんなときはやっぱり骨身を惜しまずにやんないと、放送作家ダメなんだよ、骨身を惜しんでね、ちょっと斜めに「どうかね」とかってよ。「おめえがどうかねえだろう」とかあんのにさ、そうやっぱりバシッていかなきゃ駄目。それはそうだね。いないの、あのイッセー尾形みたいな人、あの人もしけると思ったらいけたもん。とんねるずもしけると思ったもん。いま当たり前のこと言ってる。とんねるず初期のときにね悩んだんだからねとんねるず。どうしたらいいだろうって、それで秋元が「とんねるず浮いてますけど、どうしましょうか」っていうから、「大橋巨泉事務所に入れるな」って。「あそこは大橋巨泉事務所なんだぞ、大橋巨泉の事務所なんだぞ、あんたとこいれるな」、ってやめたんだもん。

あのヤスガもそう。小さんさんとの。もううすごい勢いで「どうしまししょうどうしまししょう」って。おかみさんが言ったときに、「巨泉事務所は入れないでください」って言ったんだもん。巨泉の事務所だから。

さらだ：イヤサカさんね、今話題のね。

奥山：そうそう。なんでこんな話だったんだよね

さらだ：なんか売れてるタレントを。

奥山：だからそういうのいないのかって。

東海林：てことはこれから放送作家を目指す人が、売れそうなタレントを何人か抱えてると成功できると。

東海林：エド・はるみは？

奥山：好きなの、エド・はるみ？

さらだ：好き。

東海林：「グー」とか好きですよ。

奥山：俺ね、困ったってのはどうしようというのは笑えないんだ、俺ね。

東海林：僕もあんまり笑えなかったんですけどね。

奥山：きーきーきーって気持ちはわかる、気持ちはわかる。「かー、ださいなるほどなるほど」それだけだったのよ。すごいよあれ。

さらだ：でもね、最近落ち着いてきた。あの緩急を使い分けるようになって、初め全部キワモノで出てたんだけど、かわいそうだったね痛くて。それがいまね、あのエドさんでドラマ書きたいっていう女性の脚本家がいっぱいいるんですよ。

奥山：講演もすごいって。だから、ああいうふうになれる、なれなくはないんだよたまこさんも。一生懸命になれば。

さらだ：これでね、ちょっとエドさんより年上ですけど、私。

奥山：そうなの、そんなになっちゃったの。

さらだ：うん。

奥山：あらららら。でも騙せるぞ、まだな。

さらだ：騙せる。騙しんぐ。みたいな。

奥山：いや、偉いわ。あの人は偉い。

東海林：じゃあ、結局これからのテレビ業界はまだまだ。

さらだ：可能性はあると。

奥山：ところで、もう15年ぐらい前なんですけど、愛川欽也と藤村俊二と奥山コーシン3人で飯を食ったときに、「どうするおい？ これからなあ、上から電波バーっと降ってくるんだぞ」って話に。

東海林：衛星放送。

奥山：「いや、そういう意味では俺たちはいい時代に過ごしたけども、俺はただただテレビの番組のまとめ屋になった」って漏らしたのは愛川欽也。

東海林：まとめ屋ね。

奥山：おひょいさんは「はっはっはっはっは」って言ってた。人生2番手だから。1番手はならないっていうのはあの人のポリシーだから。おひょいさん、いいね。

さらだ：「生きててよかった」ってね、最近連発してらっしゃるけどね。

東海林：いい俳優さんですよ、いまや。

さらだ：本当でもあの人なんか、ワインとかそういう趣味に生きてる感じがして。

(01:00:04)

奥山：だいたい趣味に生きてたね。

さらだ：いい感じのね、お歳のとり方をされている。

奥山：すごいもんだって。本当は英語もできるしフランス語もできるんだけど、全然そんなあれないっしょ。ロケを行ったときにちゃんとフランス語でフランス人に手相見てたもん。おひょいさんて言ったら、「いやだって俺はほら正常だから、ほっほっほっほ」だって。すごいね。

東海林：ということで、奥山コーシンさんをお迎えいたしました。それではお別れはですね、『アメリカ橋』を聞きながら。

さらだ：奥山さんの作詞で、歌ってらっしゃったんですよ。

奥山：歌ってるんです。

さらだ：何か百恵ちゃんと同期のとき、松田聖子さんと、その頃ですよ。

奥山：百恵ちゃん同期くらいですね。

さらだ：CBSソニーからね、“ソニーのシンデレラボーイ”とは言われなかったのね。

奥山：言われなかったね、自分で言ってたんですよ。

東海林：ということで奥山さんの『アメリカ橋』を聞きながらお別れです。どうもありがとうございました。

奥山：ありがとうございました。

(01:05:00)

さらだ：ありがとうございました。

(01:05:08)